

目的 家庭科教育の目標は、「家族の一員として家庭をよりよくしなすこととする実践的態度を有せよ」といふ。本研究は、家庭科の学習が、家庭生活にどのような生かされようかを、義務教育期の一貫校と非一貫校について実態を把握し、実践的態度の発達の相違を、家庭科教育の基礎資料を得ようとするものである。

方法 一貫校はA女子大学附属小学校、中学校を、非一貫校は、一貫校の至近距離のB・C私立小学校、D市立中学校の最高学年次生を対象とした。一貫校は1983年2月に、非一貫は1984年2・3月に、各々の課程をほぼ終了した時期に、アンケート調査を行った。調査内容は、自己生活管理、手伝いの状態、家庭科に対する態度等である。

結果 ①自分のための身の回りの仕事(各項目)を誰かがしよる子が多くなり、自分で行うは、学年に応じ増加しよるが、男女差の余りみられない項目は、自室(コナナ)の掃除、捜(物づくり)、一貫校が非一貫校より本人のみで行ふことのない項目は、日常の衣服の出し入れであった。②手伝いの仕事をみよる、一貫校、非一貫校ともに小学生の方が多く手伝うより、全体的には大差はみよる、女子の方が手伝うより率の若干高かった。か毎日送った家事を手伝うは、小学生では一貫校が、中学生では非一貫校が高かった。手伝う内容が男女差のみよる項目は、小学生、中学生ともにお便り・買物、風呂掃除、家業の手伝い等7項目であった。また非一貫校の方が高率の項目は、小学生で家族のたのみの布団の上げ下げ等であり、中学生で戸締り等であった。③中学生で家庭科の勉強に意欲的、下と見よる者は、男女共に、非一貫校の方が割増を占めしよる。